前日黄昏に露地へ水を打、燈籠幷待合行燈まで火を入れ、暫して火を消し、曉七ッどきに火を入る也、或人の云、通草を宵に消したるまゝにてかき立て火をともすれば、殘燈の趣有て一入風情あるよし、偖釜は前夜より仕懸置、客待合へ來るとき、炭を一ッ二ッ加へ、手水鉢の水を改め、迎ひ入るゝなり、偖生姜漬せんざい餅など樣の物を出し、薄茶を寛々點て閑話をなす也、薄茶濟て底を取、釜を勝手へ持ゆき、水を仕かけ濡釜にてかくる故、板釜置か竹釜置を用ゆ、去かし水をみなみな仕替るときは烹おそき故に、少しばかり水を仕替るがよし、偖炭手前濟て膳を出す時、突上ゲを明ヶ行燈を引キ、夜もほの〳〵と明るが至極の時刻なれども、餘りにケヌキ合とせんとするはよろしからず、膳を出すに席も暗ければ、行燈をくり引にそろ〳〵と引べし、猶また座中ほの暗くあらば膳を出すに、汁は何、むかふはなにと、亭主より名乘るもさびて面白し、小間にて突上ゲ窓の下へ參りがたき時は、末座へたのむべし、突上ゲなき席は、連子の戸を障子と仕替る、是も客へたのみてもよろし、偖中立までは隨分ゆる〳〵となすべし、中立後は隨分さら〳〵となすべし、客もつゞきなど乞ふもよし、

〔南方錄〕曉來會

三炭第一の火相也、初心の人の成がたき所作也、功者の亭主ならば、明朝の御會とてもの事に、曉より某御火相幷に殘燈をも見申度と云入べし、主よりは大凡に辭退有べし、去いて來分には其分也、又は雪の曉など不圖尋來客も有物也、ケ樣之事書付て傳る體にあらず、能々自得すべし、曉天の事成故、主客共に刻限遲延有物也、其變に應じて相對する事不及言、先定法定刻を以て言時は、寅の刻に爐中改むべし、是朝會の下火也、腰掛露地行燈釣燈籠等法の如し、但露地行燈抔、淺影の心持に不及、常の夜會同前也、行燈の內土器に竹輪有、亂れ燈心五筋よし、かき分て物押へあるべし、